

# 皆様の おかげベンチで 地域がいきる

街の景観保護

森林保全

障がい者自立支援

カン  
貫じん堂

伊勢市

●代表者名: 辻村みずづ ●〒516-0021 伊勢市朝熊町4383-469(伊勢市産業支援センター内) ●設立: 2008年10月  
●従業員数: 男0人・女1人 計1人 ●TEL.0596-26-2088 ●FAX.0596-26-2088  
●http://www.kanjindo.jp ●E-mail: info@kanjindo.jp



辻村みずづ代表

## 事業の概要

伊勢志摩地域を訪れる人は、年間約1千万人。伊勢市の「おかげ横丁」を訪れる観光客だけで、年間およそ410万人である。伊勢市内をよく見て歩くと、材質の異なるベンチや色々な形のベンチがある。破損したベンチなど、観光地の景観にマッチしないものもある。「貫じん堂」は、そんな伊勢の街角にさりげなく溶け込むデザインで、広告スポンサーがついた木製のベンチを設置している。

一般的にベンチは、観光客や市民に利用してもらい、そこで待ち合わせや憩いの時間を過ごすことで役目を果たす。貫じん堂のベンチは「いせしま森林組合」が県産ヒノキの間伐材を使用して製作する。適切な間伐は、森林の保全にもつながる。そして塗装や修理などのメンテナンスは、三重県の事業である「ゴールド人材センターみえ」に委託し、障がい者の自立支援に役立てている。貫じん堂は、この循環を広告料で維持するという創意工夫の事業を展開する。

人々の関わりのおかげで成り立つから「おかげベンチ」と命名。商標登録も行っている。まさに、適材適所で一席(石)二鳥の取り組みだ。



内宮前バス停

## 解決したかった課題、事業化の動機など

辻村さんは、市内にある壊れたベンチを見て、「観光地の伊勢にふさわしいベンチとは」を考え始めたのがきっかけであった。伊勢には、プラスチック製のものより木製のベンチがお似合いであろう。公共の施設では、高齢の市民が腰掛けるところが少なく困っている姿も珍しくなかった。「同じデザインと色合いの木製ベンチを置けないのか」と伊勢市育ちでこのまちを愛する辻村さんは、日頃からなんとかしたいと思っていた。「自分でやるしかない」との結論はすぐに出た。

事業化に至るきっかけは、思いがけないところにあった。伊勢市地場産業展で電気かがり火メーカーの社長と出会い、その場でその機器の販売代理店を勧められ、担当することになった。間もなく、この電気かがり火を経済産業省(新連携)認定事業へ申請するための事務を引き受けることとなる。その頃、自分の事業計画の相談に乗ってもらい、事業化のノウハウを教わった。「貫じん堂」の屋号は、お世話になったその社長(奥井貫人さん)の名からもらったものだ。

2007年、立ち上げ時の事業計画について悩んでいると、「たくさん人の意見を聞いてみたら」と伊勢市産業支援センターの職員に勧められたのが、財団法人三重県産業支援センターが主催する「みえ地域コミュニティ応援ファンド」への応募だった。事業計画の判定は、ベンチの広告料金の設定が年間2万円では事業の継続は難しいという評価で不採択だった。事業内容に問題があるのではなく、広告料金の設定など利益計画に検討余地があるとわかる。辻村さんは、もともとあきらめない性格のため、がぜん本気になった。

早速、間伐材を利用した木製ベンチを製作販売していた「いせしま森林組合」から、自費で20台購入した。伊勢市が管理する施設などに置かせてもらい、どんな反応があるか市場調査をすることになった。広告付きベンチとして営業活動を始めたが、電話しては断られ、また電話して…、の連続であった。ある日、間伐材を使用しているからという理由で、自然環境に関心を持つ市内の医師がスポンサー第1号になってくれた。心から



伊勢市産業支援センター

嬉しく思い感激した。これをきっかけに、スポンサーが少しずつ増えていった。

2008年、応援ファンドに2回目の応募をする。事業計画はもちろんのこと、地域貢献への考えや地道な市場調査が評価され採択された。この採択により、難しいとされた県営施設への設置が認められ、スポンサーを増やすことにもつながった。この間、他地域の状況を勉強したいと、自費で東京都の「想い出ベンチ」という取り組みや、鎌倉市のボランティア活動によるベンチ設置事業を視察する。また、宮川ルネサンス事業を知り、流域の美化活動や植樹のボランティアに参加。ベンチの材料となる間伐材の実態を知ることもできた。この活動が縁で、宮川ルネサンス事業の支援企業であったアサヒビールがスポンサーになってくれたベンチもある。

## ビジネスモデル

ベンチの広告掲載料は、3年間の契約である。利用者が多い場所から順に126,000円、84,000円、63,000円と3段階の設定だ。入り込み客数が多い、おかげ横丁付近が最高となる。逆に、利用者は少ないが地域に貢献していると考えられる施設での設置料は安い。主な設置場所は、駅前のバス停留所、利用者が多い行政の施設などで、同じ場所に複数台置かれているところもある。

「みえ地域コミュニティ応援ファンド」に採択されたことで、この事

## 今後の展望

現在の設置台数は、30台である。実績を重ね、まずは伊勢市内で100台の設置を目指す。その後、徐々に三重県下に広げたいとしている。ベンチの製作は、今は「いせしま森林組合」への委託であるが、これは森林組合本来の仕事ではない。市内の授産施設で傾聴ボランティアの経験がある辻村さんは、障がい者施設にまかせたいと考えている。「将来的には、木製品の製造会社を立ち上げ、健康者と障がい者が共に働ける場所を作りたい」と、どこまでも彼らの置かれた厳しい現実寄り添う。

いつも大切にしていることは何かと聞いた。「3つある」とのこと。1つ目は「できない理由を探さない」。どうすればできるかを考え、逃げ道を探さないこと。2つ目は「人との縁を大切に」。チャンスは逃がさないようにし、素の自分を認めてくれる人がいると信じる。3つ目は「決してあきらめない」。今は無理でも思いは必ず実現すると考えること。まさしく、有言実行の人である。

業の趣旨が多くの人に理解されることになる。以前より営業がしやすくなり、当初の20台から徐々に増えて今では30台が設置されている。広告料で設置費用、管理費用、保険料をまかない、残りが収益となる構造だ。

## 事業のアピールポイント

おかげベンチの背もたれにある広告スペースは、縦8cm×横48cmと景観保護の観点からさほど大きくはない。この広告プレートも木製で、朽ちたら自然に戻すことを意識している。

同時に複数名が座ることを検討に入れ、重さは70kgと倒れにくい設計だ。また、万が一に備えて死亡時1億円の対人保障付きの保険にも入る。「いずれ3億円にしたい」と、安心の向上も忘れていない。

辻村さんは、設置後3カ月に1回は巡回してベンチの状態を自ら入念にチェックする。腰掛ける人に、汚れて不快感を与えないよう1年に1回の割合で入れ替え、リニューアルする。利用者が多い場所では、1年に2回の入れ替えとなる。このメンテナンス作業が地域の小規模作業所などに委託され、障がい者の自立支援につながっている。広告主へは、リニューアル後の報告も欠かさない。このように、アフターケアは実にきめが細かく、設置場所を提供する側も安心感を強くしている。

事業の開始当初、伊勢の伝統的な街なみで有名な「おはらい町」へ社会実験として設置する際、背もたれ式ベンチは洋風であることからデザイン変更を求められた。しかし、半年間置いて利用者の声を聞いたところ、背もたれがあって座りごちが良く好評を得た。

景観だけを考えると、デザイン変更もやむなしと思っていたところ、利用者の声を優先してくれた結果、茶色からヒノキ調色への色変更だけで設置可能となった。



貫じん堂事務所